

貿易商務の実証的研究

石 田 貞 夫

Theory of Foreign Trade Practice

Sadao Ishida

貿易商務に関する従来の研究は、貿易取引に必要な技術的な仕方や、輸出入に関する諸手続きの解説に終始していたり、あるいはまた、国際売買上の慣習を法律的に歴史的に取扱うだけであって、ある場合には、理論性のない手続き便覧となり、またある場合には、貿易取引の商学的研究の範囲をこえた法学的・歴史学的研究に飛躍している。

あるべき貿易商務論の方向は、学問意識につらぬかれ、しかも高度の実践性を有するものであらねばならないが、この見地からすると、斯学における従来の研究成果は、その研究方法といい、研究対象といい、誤った方向のものが、極めて多い。

このような誤った方向は、貿易商務の最も基礎的な問題点であるマーケット・リサーチに関する研究態度のなかにも端的に現れていることができる。

従来の貿易商務論にあっても、貿易のためのマーケット・リサーチの問題は、取引関係創設のための手段として、その重要性と若干の調査項目についての解説はなされていた。

しかしながら、このマーケット・リサーチの問題を本格的に取扱うことは、むしろ、貿易商務論本来の研究対象からはずれているかのごとき錯覚のもとに、これを敬遠する傾向さえ強かった。

そもそも、実践性を欠いた貿易商務の法律的・歴史的研究の方向においてはもちろんのこと、実践性の強い貿易手続き便覧的な方向においてさえも、せっかく、実践的な問題意識を有しながら、実は、余りにも、その視野が現実接近し過ぎていたために、貿易取引の成立、すなわち、貿易企業間の末端的な接触の出合いを、与えられた条件と惰性的な環境のもとでの静態的な事象として把握するだけで、さらに一步、問題を掘りさげて、末端的な接触がなされる前提的な条件如何について、分析のメスを入れることをしていない。

したがって、そこでは、ただ、末端的接触の現象を

表面的に静的にとらえ、その事後処理如何を取扱うだけであって、きわめて消極的な実践性しかもたない研究成果しか期待できないことになってしまった。

末端的に接触する売買両当事者のそれぞれは、相異なる国民経済の経済循環に呼吸しながら、しかも、それぞれの貿易企業としての規模、業態、成長率は、千差万別である。したがって、貿易取引における末端的な接触は、ただ一つの静的な結びつきではなく、売買当事者それぞれが立脚している経済循環如何によって、また、接触しようとしている貿易企業の業態如何によって、あるいはまた、貿易商務の客体である取扱い商品如何によって、多様な結びつきが考えられる。

この点については、昭和39年度に行った貿易商務に関する実態調査においても、中小規模商社と大手貿易商社との場合には、その末端的接触の方法も、マーケティング・リサーチに対する態度なり、考え方なりにも大きい相違があることが実証されている。

総じて、貿易商務の主体である売買両当事者の各々が立脚している経済循環の特殊性と、それが商務の主体を通して結びついた時点の歴史性によって、また、商務の主体の業態と、商務の客体である取扱い商品如何によって、末端的な接触は数多くの結びつきの可能性を有している。

私の意図している本研究においては、無数の可能性を有するこの末端的接触の形態を実証的に集収、分類するとともに、そのような末端的接触が成立つための結びつきの原理如何を探索し、さらに、所与の末端的接触、すなわち、貿易取引形態のなかで、どのような貿易商務が、他の貿易取引形態の場合と異って行われるかについて分析したいと考えている。

昭和38年、39年と、これらの研究のための資料収集のための実態調査を行ったが、昭和40年度においては、これまでの国内的な貿易商務実態調査と併行して海外市場における調査をも実行する予定である。